

## 白鳥庫吉と学習院

SHIRATORI Kurakichi and GAKUSHUIN

内野 敦\*  
UCHINO Atsushi

### はじめに

近代日本における東洋史の開拓者である白鳥庫吉は、東京帝国大学教授であるとともに、学習院教授でもあった。筆者（内野）は2017年に「白鳥庫吉の歴史教育について」という小論を『学習院大学教職課程年報』に掲載していただいた。これは歴史研究者としてよりも、歴史教育者としての白鳥に焦点をあて、その歴史教育論、歴史教科書、歴史授業を論じたものである。<sup>(1)</sup>

本稿ではさらに白鳥の学習院での教員生活について焦点をあて、その人間関係を解明していきたい。

白鳥庫吉は1865（慶応元）年、現在の千葉県に生まれた。父は農業白鳥嘉一郎である。1883（明治15）年に千葉中学校を卒業、1890（明治23）年に帝国大学文科大学史学科を卒業した。帝国大学卒業とともに学習院教授に就任し、中等学科・高等学科で歴史の授業を担当した。このとき東洋諸国の歴史を担当したことから、東洋諸民族の歴史を研究するようになった。1904（明治37）年には東京帝国大学文科大学史学科教授を兼任するようになった。1921（大正10）年に学習院教授を免ぜられ、東京帝国大学専任の教授になったが、30年以上にわたり、学習院での教員生活を送っている。<sup>(2)</sup>

白鳥の歴史研究は広大かつ歴大である。東洋史だけでなく、邪馬台国など日本史に関する研究論文も多い。その主要な著書・論説は『白鳥庫吉全集』（全10巻）に収められている。ただし、全集未収録の文章も多い。<sup>(3)</sup>

一方で、白鳥その人についての研究は少ない。代表的な研究としては、津田左右吉「白鳥博士小伝」、石田幹之助「白鳥庫吉先生小伝」、五井直弘『近代日本と東洋史学』、窪添慶文「白鳥庫吉」などがある。白鳥と並ぶ東洋史学の開拓者である内藤湖南については、星の数ほどその研究があるのに比べると、寂しいものがある。<sup>(4)</sup>

本稿では白鳥の学習院での教員生活に焦点をあて、その人間関係を解明していく。重要なのは上司にあたる院長との関係である。白鳥在職中に大きな学習院改革は、

第4代院長	三浦梧楼	1888（明治21）年11月～1892（明治25）年3月
第7代院長	近衛篤磨	1895（明治28）年3月～1904（明治37）年1月
第10代院長	乃木希典	1907（明治40）年1月～1912（大正1）年9月

のときに行われた。これらの院長をどのように評価し、いかなる関係を築いていったのか。また白鳥の人生に大きな影響を与えた同僚として、市村瓊次郎教授、大村仁太郎教授がいる。彼らとどのような関係を築いていったのか。そして白鳥の教員生活はどのようなもの

---

\* 学習院大学教職課程非常勤講師・開成中学高等学校

だったのか、解明していきたい。

## 1. 三浦梧楼院長時代

### (1) 三浦梧楼院長の改革

1890（明治23）年7月、帝国大学文科大学史学科を卒業した白鳥庫吉は、8月に学習院教授となった。どうして学習院に就職したのだろうか。未刊となった『学習院物語』所収の「学習院と文部省」という文章の中で、白鳥は

現在の大学生は在学中に卒業後の方針即ち就職口の心配をしなければならないが、当時は甚だのんきで、そんなことを考へる必要は少しもなかつた。兎に角明治二十三年私は大学を卒業した。卒業後直ぐ友人の澤柳政太郎君の世話で学習院教授に任ぜられた。澤柳君には私の方から就職を依頼したのであつたかどうかはもう忘れてしまつたが、兎に角これが私と学習院との間に關係の出来たそもそもの始まりである。<sup>(5)</sup>

と述べている。澤柳政太郎といえ、東北および京都帝国大学総長をへて、成城小学校を創立した教育家として名高い。澤柳は1888（明治21）年に帝国大学哲学科を卒業し、直ちに文部省総務局に就職している。白鳥が学習院に就職した1890（明治23）年には、文部省に勤めているので、何らかの世話をしたのだろう。その後も白鳥と澤柳の友好は続いたようで、1893（明治26）年に澤柳が大谷尋常中学校校長に赴任するため京都に移住した際には、末弟の猛雄を白鳥の家に寄寓させている。<sup>(6)</sup>

そして白鳥が学習院に赴任したとき、院長は三浦梧楼だった。三浦梧楼といえ、長州藩出身の軍人・政治家である。後の話だが、1895（明治28）年、全権公使として朝鮮に駐在中、閔妃暗殺事件に関与したことで知られる。軍人の三浦梧楼は1888（明治21）年に学習院長に就任した。初め、司法大臣の山田顕義が三浦に学習院長就任を要請に来たとき、三浦は「それはいかぬ、畠が違う」と言って断つたという。それでも再三の要請によって就任した。「事情止むを得んから就任することは就任するが、長くはご免蒙りますぜ」と黒田清隆首相に言って、しぶしぶ引き受けている。<sup>(7)</sup>

仕方なく引き受けた学習院長の職だったが、三浦は熱心に学校改革を断行した。三浦の改革は、学習院学則の制定、教科書および教学聖訓の編纂、学習院官制・服務細則の制定、教員会・評議会の設置、学制心得・寄宿舎規則等の整理と改定、四谷区尾張町の新校舎建築、輔仁会の創設、など多岐にわたる。とくに新しい学則の制定により、初等学科6年、中等学科6年、高等学科3年、別科3年、海軍予科3年、という新しい教育体制を成立させた。そして歴史教育のあり方に根本的な改革を加え、中等学科における歴史の授業時数を倍増させた。内容的には「日本歴史」「支那歴史」「欧州歴史」があるが、とくに「日本歴史」を重視している。また高等学科の歴史には「日本歴史」の他に「欧州歴史・米国歴史」「東洋諸国歴史」の科目をおいた。<sup>(8)</sup>

このような三浦の改革に対して、白鳥はどのように評価したのだろうか。前出の「学習院と文部省」の中で白鳥は三浦を「極めて見識の高い人」とし、文部省の学校とは異なる独特の学制の創設を高く評価している。とくに西洋文化謳歌の時代にあつて、日本史・東洋史の時間を多くしたことに触れ、

歴史を以て人を陶冶するといふ考へ方、及び国史を尚び、近隣諸国民の歴史を省みる

といふやり方は、今日でこそ何等珍らしい方法ではないが、当時に於ては全くの大英断で、誰も思ひつかないことであつた。これを以てしても三浦將軍の眼識の程は判断出来よう。(9)

と絶賛している。このように三浦の改革に大きく賛同し、学習院での教員生活を開始させることが出来た白鳥は、幸運だったと言えるだろう。

三浦と白鳥の直接的な交流がどの程度あったのかは不明である。しかし三浦と白鳥の間には、共通項があった。というのは、雲照律師との関係である。

三浦は学習院長の時代に二番目の娘を病気で亡くしている。このとき誰かが「この頃、雲照律師という如何にも尊い僧侶が、東京へ出て来ておられる。一べんこの方に経を読んでもらったらよいでしょう」と勧めたという。ところが実際に会ってみると、「あの人のもっている徳に感化された」ほどの感銘をうけ、三浦は雲照律師の弟子となった。(10)

出雲国出身の雲照律師は、仏教界刷新を唱えた人で、1885（明治18）年に東京に移り住んだ。目白に建立した新長谷寺は、後に目白僧園とよばれ、明治期後半の仏教刷新運動に大きな役割を果たした。政界や学界の指導者も多く訪れたという。この目白僧園の経営をしていたのが、白鳥の友人、澤柳政太郎だった。(11)

そして白鳥もこの雲照律師のもとで修業をした。白鳥の孫である白鳥芳郎によると

祖父は、若い頃、癩癩がおさまらないので、修養するため、目白不動の僧侶であった雲照律師の下に赴き、親しく仏法を学び、専ら気分を平静に保つよう努力したという。以来雲照律師から譲り受けたという木魚を座右に置き癩癩が起るたびにこれを叩いて精神修養に励み、このような修業は二十六歳で結婚するまで続けられたという。(12)

とあるので、白鳥もかなり雲照律師の影響を受けたことが分かる。

ただし、修業は「二十六で結婚するまで続けられた」というのは白鳥芳郎の勘違いで、実際は数え三十歳で再婚するまでではないかとの指摘もある。(13)

いずれにしろ、白鳥と三浦はともに雲照律師に深く傾倒しており、そのような精神的つながりが白鳥の三浦に対する信頼感につながったのではないかと思われる。

## (2) 市村瓊次郎との出会い

白鳥の学習院への就職は、市村瓊次郎との出会いをうんだ。市村瓊次郎は後に東京帝国大学の教授として支那史を講じ、日本の東洋史学界の指導者となった人物で、『東洋史統』などの著作がある。市村は1887（明治20）年、帝国大学古典科漢書課を卒業し、翌1888（明治21）年に学習院備教師となった。白鳥が学習院に就職した1890（明治23）年に、市村は学習院助教授に任ぜられた。(14)

前述のように、三浦院長のもとでは歴史が重視され、中等学科では「日本歴史」「支那歴史」「欧州歴史」、高等学科では「日本歴史」「欧州歴史・米国歴史」「東洋諸国歴史」の科目がある。このうち市村は「支那歴史」を担当した。白鳥は中等学科の「日本歴史」や「欧州歴史」、高等学科の「欧州歴史・米国歴史」「東洋諸国歴史」を担当することになった。しかし、「東洋諸国歴史」は本邦初の科目である。白鳥は「学習院に於ける史学科の沿革」という文章の中で

西洋史なら専門だし、国史や支那史なら兎に角教授の見当もつくけれども、東洋諸国

歴史では全く手もつきません。で、市村氏に「貴方は支那史をおやりだから、東洋諸国の歴史もやつて戴くべきだと思ふ。」と申したところ、忽ち、「私は東洋史はやらぬ。大学を出た人がやるべきだ。」とのお返事です。そこで仕方がなく此の困難な学科を受持つことになりました。<sup>(15)</sup>

と述べている。市村もちろん大学を出ているのだが、古典科の出身であり、史学科の出身ではない。先輩の市村に、「東洋諸国歴史」というやっかいな科目を押しつけられた形だが、これが「東洋史学者」白鳥庫吉をうんだ。「東洋諸国歴史」を教授するために、東洋諸国の歴史の研究をせざるをえなかったからである。もともと帝国大学史学科では、教員はドイツ人リースしかおらず、西洋史の講義しかなかった。白鳥が東洋史に足を踏み入れるきっかけは、偶然だったのである。

こうして白鳥の教員生活は始まった。その授業風景については、拙稿「白鳥庫吉の歴史教育について」で述べているので、ここでは詳しくは述べないが、学問の面白さを伝えながら、人間の血や肉のある、生きた歴史の授業を展開していた。<sup>(16)</sup>

同時に、白鳥は歴史標本の蒐集にも熱心だった。たとえば1906（明治39）年には満州朝鮮地方に旅行し、歴史標本の蒐集に出かけている。<sup>(17)</sup>

さて、白鳥と市村の人間関係はどうだったのか。市村は1898（明治31）年に東京帝国大学文科大学助教授になっている。学習院教授もしばらく兼任するが、やがて東京帝国大学の専属になった。一方、白鳥も1904（明治37）年に東京帝国大学文科大学教授と学習院教授の兼任となる。こうして白鳥と市村は東京帝国大学で再び同僚となった。「市村博士は主として、支那内地の史実を考究し、余輩は専ら塞外の事象を検討した。かくて市村博士と余輩とは、互に補足的の関係に置かれて来たことは、不思議な因縁と思はれてならない。」と白鳥は述べている。<sup>(18)</sup>

一方、市村は白鳥のことをどのように見ていたのだろうか。市村は「私は博士と性格の上に相違があるにも拘はらず、四十年に垂んとする交際に於いて未だ一度も衝突したことが無い」と述べている。それは市村と白鳥に「公明正大で常に不正不義の行為を喜ばなかった」という共通点があるからだという。<sup>(19)</sup>

このように、白鳥と市村は生涯にわたって良好な関係を築いていた。教育と研究の分野が相互補完的だったのも幸いだった。学習院におけるこの2人の出会いは、本人のみならず、日本の東洋史学にとっても幸運なものだったといえるだろう。

### (3) 大村仁太郎との出会い

白鳥は1894（明治27）年、30歳のとき、大村仁太郎の妹茂子と結婚した。白鳥にとっては再婚である。最初の妻を亡くしてから心身が弱り、雲照律師から譲り受けた木魚をたたきながら修養していた時期にあたる。大村仁太郎は、当時は学習院教授をしていた。白鳥の娘君子によると、「大村伯父は父を見込んで妹の茂子をせつとくして見合をさせた」のだという。<sup>(20)</sup>

大村仁太郎は有名なドイツ語学者であり、また教育家である。学習院退職後は、獨逸学協会学校中学の校長にもなった。大村は小石川水道端に徳川幕臣の子として生まれている。東京外国語学校に学び、1886（明治19）年に学習院教授となった。このときの学習院院長は第3代大鳥圭介である。大鳥の別荘が神奈川県酒匂の海岸にあり、避暑に訪れた大村と知り合いになったことがきっかけらしい。

大村仁太郎は『独逸文法教科書』、通称「三太郎文典」の編纂者として名高い。大村仁



太郎、谷口秀太郎、山口小太郎の名をとったもので、広く世の学生に用いられた。白鳥も「三太郎先生のドイツ文法と云うのは、有名なものでありまして、ほとんど知識階級で此の三太郎先生と云う名を知らない人はない位、有名なものであります」と語っている。<sup>(21)</sup>

大村は学習院に就職すると、ドイツ語教育のみならず、学校運営にも積極的にかかわった。学習院教授と兼任して、獨逸学協会学校の幹事もしていたのだが、学習院の校務も決して怠らなかつた。白鳥によれば、「或は輔仁会々長となつて、正課以外に学生の訓育を掌つたり、又は教科書の編纂や、大学科、高等科の学制調査や、寄宿舎の設備や、総て一般の教育に関する事件には殆どたづさはらぬ事が無い位であつた」という。<sup>(22)</sup>

白鳥は大村の性格について、「美しき性質」「極めて忠愨誠実の人」として、高く評価している（愨<カク>はまこと、実直の意味）。「事に当るに臨みては思慮緻密、用意周到、微細の点まで自ら研究し自ら処理せざれば止まざる風ありき」という。しかし次のような一面もあった。

君はまた自己に忠実なるが如く、人に対しても甚だ忠実にして、自ら欺き他を欺きて一時を糊塗するが如きこと無く、所謂「お世辞」をいひ「お座なり」をいふこと無かりき、此の故に知らざるものは時に君を目して厳格に過ぐとし、近づき易からずとせしことなきにあらざるが如きも、一たび近づけば何人もよく其の嚴然たる態度の裡に温乎たる愛情のあふるゝを認めざるを得ざりき<sup>(23)</sup>

このように、本当は愛情あふれる人なのだが、その厳格さ故に、誤解を招きやすい一面があったらしい。

市村瓚次郎も大村とは親しく交際したが、「或は君を以て峻酷の人となし或は君を以て権謀の人となすものありき」として、世の人の誤解を招きやすい人柄について述べている。しかし市村も大村のことを「正義を好み詐術を悪み」、「他人に対する同情も決して浅からざりしなり」として、正義感と人情のある人物だとしている。<sup>(24)</sup>

大村仁太郎は自分にも他人にも厳しいところがあり、敵を作りやすいタイプだったらしい。そのような大村に対し、白鳥は美質を見だし、親しく交際し、ついにはその妹を妻に迎えて、義弟となったのである。

## 2. 近衛篤磨院長時代

### (1) 近衛篤磨院長の改革

1895（明治28）年、第7代学習院院長に近衛篤磨が就任した。近衛篤磨といえば、貴族院議員、貴族院議長となり、またアジア主義の立場から東亜同文会を組織したことで知られる。また近衛文磨の父としても有名である。

なぜ近衛篤磨が学習院院長に選ばれたのか。山本茂樹氏の研究によれば、一つは近衛家というネームバリューである。当時の学習院生は身分意識が強く、学習院改革を断行するには公爵の家柄がものをいうだろうということ。もう一つは近衛が以前から華族の腐敗ぶりを批判しており、華族改革を主張していたことが、何らかの影響を及ぼしたのだろう、ということである。<sup>(25)</sup>

近衛院長の就任に対し、白鳥はどのように見ていたのだろうか。白鳥は後年、「学習院長としての近衛篤磨公を顧ふ」という文章で次のように述べている。

公の院長として学習院に臨まれた精神は、期せずして三浦院長と合体するところがあつた。言はゞ先きに三浦院長によつて、院の法律即ち学制は、完成を遂げてゐた。併しこの立派な制度を、運用すべき名院長を欠いてゐたと云ふ姿が、当時の学習院の状況であつた。ところが、茲に実現した公の院長御就任は、三浦前院長の主義主張を実行發揮する上に、最も適任なるその人を得たこととなり、学習院の歴史の上に、特筆大書すべき、一紀元を画したものと言はねばならぬ。<sup>(26)</sup>

このように、白鳥は近衛のことを三浦院長の精神を継ぐものとして、絶賛している。「欧米追従、洋風模倣」の時代にあつて、近衛は「亜細亜主義」の人だったからである。清朝要人とも交流があり、のちに東亜同文会会長となった近衛のことを、東洋史の研究者である白鳥が高く評価するのは、当然かもしれない。

さて、当時、学習院にとって大きな問題だったのは、校舎移転問題である。1894（明治27）年の地震により四谷の校舎が被害を受けたため、これを機に校舎移転計画が持ちあがっていた。近衛が院長に就任すると、田中光顕前院長の意見を踏襲して、初等学科の校舎は四谷に新築し、中等学科以上の校舎は地方に新築することにした。中等学科以上の移転先としては、初めは神奈川県小田原を考えたが、反対する者が多く廃案となった。そこで北豊島郡高田村大字高田に決定した。現在の豊島区目白である。しかし1897（明治30）年、高田村での新校舎建築が裁定されたが、材料費および人件費の高騰のため予算不足となり、建築は一時中止となった。近衛は校舎建築のため宮内省としばしば協議し、尽力したが、着工はかなわなかった。

近衛にとつてもう一つの大きな課題は大学科の設置である。じつは三浦梧楼院長のときに設置された別科は、1893（明治26）年に大学科と改称され、一度大学科は設立されていた。しかし当時の文部大臣の方針により帝国大学教授に講義を委嘱することが困難になったため、田中光顕院長のとき大学科は中止となった。その大学科を復活させようというのが、近衛の念願であつた。1896（明治29）年には大学科の教育課程が改正され、1898（明治31）には授業が開始されることになった。<sup>(27)</sup>

近衛のねらいは大学科をつくることで外交官を養成したい、ということにある。外交官こそ「自ら皇室の藩屏を以て任ずる所の華族に於て適當の職務ならずや」というのである。「国际上我国の体面を汚さざる迄の行動の如きは、実に資力あり、地位ある貴族にあらずしては到底能はざる所なり」として、学習院こそ外交官の養成をするべきだと考えた。<sup>(28)</sup>

そうなる問題となるのは大学教員の確保である。帝国大学教授に多くの講義を委嘱するのは困難なため、専任の大学教員を独自に養成しなくてはならない。そのため、1900（明治33）年に「学習院外国留学生規定」を定め、学習院の学生、卒業生、教員を海外に留学させることにした。数名の者が海外に派遣されたが、1901（明治34）年には、大村仁太郎と白鳥庫吉が留学することになった。<sup>(29)</sup>

## (2) 欧州への留学

1901（明治34）年春、白鳥は海路ヨーロッパへ向かった。フランスに上陸後、ドイツに行った。ベルリンで或いは大学の講義を聴講し、或いはトルコ語の研究につとめた。それからハンガリーのブダペストに留まり、その言語や歴史を研究している。翌1902（明治35）年にはドイツのハンブルクで開かれた国際東洋学会に出席し、各国の東洋学者と親交を深めた。さらにパリに留まり、東洋学に関する書物の蒐集をした。それからフィンランドに入り、ロシアで学界を視察し、シベリア鉄道によって帰国した。帰国したのは1903（明

治36)年の冬のことである。<sup>(30)</sup>

この間、白鳥はしばしば近衛に書簡を送り、近況を報告している。例えば1901(明治34)年6月28日付けの書簡では、ベルリン滞在の留学生に「ノラクラ者」が多いことに驚き、とくに学習院出身の学生で「ノラクラの随一とも巨魁とも目せらるゝ者」がいることを、学習院の恥として嘆いている。

また、同年10月20日付けの書簡では、どういうわけか白鳥が病気になったと日本で噂されていることに驚いている。親戚友人より見舞状が続々と届き、「或は小生吐血したりと云ひ、或は胃病に罹れりと云ひ、或いは肺病なりと云ひ」ということで、白鳥も困惑している。もちろんこの白鳥重病の噂は、でたらめである。<sup>(31)</sup>

ベルリン大学で白鳥は高名なりヒトホーフェンの講義を聴講した。大いに期待して教室に出たが、講義はつまらないものだった。白鳥からすれば、子どもだましのような話だったらしい。ところがゼミナールに出席すると、全く違った。

説く所は微に入り細を穿つて余す所なく、壁面の書棚から数十の参考書を手にまかせて引っぱり出し、必要箇所を囊中の物を探るが如く開いては学生に見せ、詳しくはここをこの次までに読んでこいといふ指導ぶりで、なる程これこそ一流の碩学だと感嘆し、前の平凡な概説の時とは人が違つたかの如く見えたものだ。<sup>(32)</sup>

このようなゼミナールの教育法を、白鳥はベルリン大学で学んだ。このような教育法は、学習院の大学科で生かすつもりだったに違いない。

こうして、研究や語学の習得に、学校視察に、資料蒐集に大きな成果をあげて、白鳥は帰国した。ところが、このころ学習院では意外なことが起きていた。近衛院長が病床にあり、また白鳥より早くドイツ留学からもどっていた大村仁太郎が退職したのである。

### (3) 近衛院長の病死

1903(明治36)年1月、近衛篤磨院長は肺炎になり、療養した。いったん回復したが、6月には咽喉部が発病した。9月に入院し、12月には退院したものの、翌1904(明治37)年1月2日に近衛は逝去した。学習院の目白移転にそなえて、近衛は自宅を麴町から目白に移していた。しかし目白での新校舎建築はすすまず、近衛は病床でも校舎建築のことを気にかけていたという。<sup>(33)</sup>

白鳥は1903(明治36)年の年末に帰国し、留学研鑽の結果を報告しようと近衛邸に参じたが、すでに病は重く、面会は許されなかった。ついに近衛に会えぬまま、近衛は逝去した。「自分は公に対して永遠に復命出来なくなつて了つた。洵に痛惜に堪へぬ次第である」と白鳥は述べている。<sup>(34)</sup>

一方、大村仁太郎は1903(明治36)年夏、白鳥よりも早くドイツ留学から帰国した。ところが、近衛院長が病床についている。もともと学習院には独逸学派と英学派の対立があった。近衛院長はドイツの大学で学んだことがあり、ドイツの教育をモデルに学習院の改革をすすめていた。大村仁太郎も白鳥庫吉も近衛院長の側の人間で、独逸学派である。これに対し、学習院には神田乃武ら英米学を信奉するグループがあり、近衛や大村と対立していた。そして大村留学中に英学派が院内で優勢となり、しかも近衛は病床にあったので、大村が学習院に戻っても居場所がなかった。ついに大村は学習院を退職することになる。もともと獨逸学協会学校幹事を兼任していた大村は、その中学校長に就任することになった。<sup>(35)</sup>

近衛院長が死去し、大村仁太郎が退職となり、学習院内の大村グループは壊滅した。しかし、その中で白鳥は学習院に残った。「この時私が残されたのは全く運のいゝ話であつた」と白鳥は述べている。<sup>(36)</sup>

そして近衛院長が再建した大学科であるが、こちらも学生があまり集まらなかった。近衛院長が死去すると、大学科廃止の議論がおこり、1905（明治38）年、大学科は廃止された。

一方、校舎建築の方は1906（明治39）年、ようやく予算が認められ、着工の運びとなった。神田乃武教授が新築校舎設備調査委員長となり、白鳥以下6名がその委員に任命された。<sup>(37)</sup>

### 3. 乃木希典院長時代

#### (1) 乃木希典院長の就任

1907（明治40）年、第10代学習院院長に乃木希典が就任した。乃木希典は陸軍大将であり、日露戦争において、第3軍司令官として旅順を陥落させたことで知られる。当時の日本でその名を知らぬものはないだろう。

乃木が学習院院長になったいきさつは有名である。日露戦争で数万の将兵を死なせたことへの自責と、2人の息子を失った傷心の乃木に対し、明治天皇が「希典、今は悉く愛子を失ひたれば、その代りに沢山の子を与ふべし、今より学習院の生徒を汝の子と思ひて育てよ」との思いから、その任に就けたのだといわれる。<sup>(38)</sup>

乃木は院長になると、自ら率先して寄宿舎で起居し、寮生の指導にあたった。学習院中等学科・高等学科は1908（明治41）年8月に目白に移転し、全寮制となっている。折りにふれ、学生に訓示を与えた・・・堅実なる精神を發揮せよ、男子は男子らしくあれ。依頼心を去り、独立独行の気風を養成せよ。平常も試験の時の如く勉強せよ。物事に耐ふる身体を作れ。人間の価値は眼にあり、眼のつけどころに注意せよ。言語は明瞭にせよ・・・等々。<sup>(39)</sup>

有名な乃木の歌に「寄宿舎で楽しきことをかそふれば 撃剣音読朝めしのおじ」とあるように、乃木は学生とともに質実剛健の生活を送った。朝夕は学生と食事を共にし、剣道の授業では自ら竹刀をふるって稽古をつけ、夜の自習時間には訓話や音読をした。<sup>(40)</sup>

このような軍人院長の登場に対して、白鳥はどのように見ていたのだろうか。実は最初は心配していた。「万一軍隊的の峻烈な態度犯すべからざる威厳を以て学生に臨まれたならば、まだ意志の弱い学生は畏縮してしまふやうなことはあるまいか」と憂いていたという。ところが実際に乃木に接してみると、その心配は全くの杞憂にすぎなかった。「如何にも厳格なお方であらうと考へてみましたのとは反対で、真に温容親しむべしといふ感じを与へられました」という。学生に対しては「何時でも温和に穏かな調子」であり、また教員に対しても甚だ鄭重で、必ず何某先生という呼び方をしたらしい。しかも穏やかなだけでなく、「なすべきことは必ず為す、守るべきことは何処までも守る」という鞏固な信念をもっていたという。「春風の如く和らかな温い玉のうちには鉄石の如き氣象が厳として存して居るのであります」と白鳥は乃木を評している。<sup>(41)</sup>

乃木と白鳥の人間関係はどのようなものだったのだろうか。白鳥の娘君子によると、乃木は学習院に近い落合にある白鳥の家にちょくちょく来訪し、「いつも庭木戸をあけて縁側に腰をかけながら親しく話をされた」という。



或日ふと夫清が十八歳の時盲腸炎にかかり手術後腎臓を悪くして、陛下の侍医であった入沢達吉博士から、あと八年の生命と宣告されたことなどお話すると、将軍は早速煎じて飲むと大そう効くというタラの木の皮を沢山持ってきて下さった。その御親切を忘れない。<sup>(42)</sup>

と君子は回想している。このように乃木と白鳥は親密に交際していたらしい。

白鳥によると、乃木がタラの木の皮を持ってきたのは、乃木が自害する十日ほど前のことだった。自害の決心をしていたはずだが、そのような容子は少しもなかったという。<sup>(43)</sup>

もっとも乃木に対して、嫌な気持ちをいだいたこともある。白鳥の孫芳郎によると、白鳥が図書館で一生懸命勉強していると、「後から乃木さんが抜き足、さし足でやってきて、肩ごしから何をしているのか、と言っのぞいて、何でこんなつまらんことをやるのだ、というようなそぶりを見せられた」という。<sup>(44)</sup>

この時はさすがに白鳥も嫌な気分だったらしいが、白鳥への好意と関心がなければ、乃木もこのようなことはしなかったはずだ。乃木と白鳥は、ただの院長と教員の関係をこえて、親密に交際していたと言えるだろう。

## (2) 乃木院長の自刃

1912（明治45）年7月30日、明治天皇が崩御し、大正と改元された。同年9月13日、明治天皇の大喪があった。

明治天皇の大喪の日、白鳥は大礼服に喪章をつけて行列に加わっていた。白鳥の娘君子によると、「その真夜中にあわただしく門をたたき音がしたので、万一父に何事かあったのではないかとおそろおそろ門をあけると、思いもよらぬ乃木將軍と夫人が自刃なさったと云う知らせ」であった。疲れて帰ってきた白鳥は、すぐに乃木邸に駆けつけた。<sup>(45)</sup>

乃木院長は自刃する1週間前の9月6日、職員学生一同を正堂に集め、訓示を与えている。その訓示では明治天皇崩御により始業式を延期することを述べ、その間は勉強することが最も善い謹慎の方法であるとした。

勉強するといふことは、決して自分一個の為と思つてはならぬ。常に君の為、国の為にすること、心得べきである。此の君の為国の為に尽すについては夫々尽し方があらう。我々の様な老人は何時死ぬかも知れぬ—老少不定といふこともあるが—若い人よりは先に行くのが当然と思はねばならぬ。若い諸子は先の長いことであるから、これから自己の利益の為でなく、君国の為に十分勉強して君の為並に国の為に御役に立たなければならぬ。<sup>(46)</sup>

乃木はこのように訓示を与えた。乃木にすれば、生徒への遺言のつもりだったろう。もちろんこの時点で、まさか乃木が自刃しようとは誰も夢にも思わなかつただろうが。

遺言といえば、乃木は多くの知人にそれぞれ遺書を残している。その遺書の一つに、学習院教授の福原鎌二郎・白鳥庫吉・松本源太郎に連名で宛てたものがある。内容は新院長が決まるまでは宮内大臣に相談して欲しいこと、学習院女学部の校舎建築は大体決まったこと、男子部実修科の成立に尽力して欲しいこと、などの事務的な内容である。<sup>(47)</sup>

乃木院長自刃後、白鳥が院長事務取扱となった。院長事務取扱は短期間で終わり、同年11月には陸軍大将大迫尚敏が次の院長となった。じつは白鳥は宮内省や学習院関係者から院長就任を要請されたのだが、白鳥は固辞した。その理由について津田左右吉は「博士は、

どこまでも、自己の任務を学問の研究にあり」としたためであろう、と推測している。<sup>(48)</sup>

### (3) 乃木院長への追悼

乃木自刃の30日後、10月12日に学習院で乃木院長追悼の会が開かれた。この会で白鳥は講演を行った（「追悼会に於ける白鳥博士講演」）。

この講演で白鳥は、乃木は「誠に温かい柔しい御方でありました」と述べる。そして「我々が乃木大将に学ぶべき所は大将平生の心事、大将の人格にある」と訴えた。それは「責任を重ぜられ、又た同情の厚かつたこと、即ち義理に固く、情けに深かつたこと」である。また乃木が平生と変わりなく「従容として死につかれたのは、やはり平生の修養の結果」とであると述べた。

大将には自分の衣食住をどうするといふやうな考はまるで無かつた。さういふ私欲らしいものの影もない。富はもとより要らぬ。名も亦た要らぬ。生命もまたいらぬ。だから勇気が出る。戦争に於いて非凡の勇将となれたのも、之が為めである。戦争ばかりで無い。山中の賊を破るは易く、心中の賊を滅すは難いといふことがあるが、大将が遺憾なく心中の賊を滅し尽された非凡の勇気も、亦た全く此の私欲を捨てられたからのことでもあります。

として、乃木から学ぶべきはその死のことではなく、このような根底の修養にあるのだと強調した。そして我々が乃木に報いる法は、「たゞ各々其の業務を勉励して、他日国家の為に有用なる人物になるといふことより外は無いのであります」と学生たちに訴えたのだ。<sup>(49)</sup>

また、乃木が自害して3年後、中央乃木会という会で白鳥は「乃木將軍と大和魂」と題して講演をした。この講演の中で白鳥は「將軍の精神は即ち日本国民の精神、將軍の御性格は即ち日本国民の理想の性格」とし、「此の精神を名づけて大和魂と申します」と述べた。その「大和魂」とは「優しく美しい情のあること、さうしてそれと共に武勇の気象のあること」だとしている。<sup>(50)</sup>

このように、白鳥は乃木の精神を称え、日本人の理想だと絶賛した。もちろん追悼の場で故人を称えるのは当然としても、その絶大な賞賛ぶりから、乃木に深く敬愛の念を抱いていたことがわかる。

### おわりに

以上、白鳥庫吉の学習院での教員生活について、三浦梧楼院長、近衛篤磨院長、乃木希典院長、そして同僚の市村瓊次郎、大村仁太郎との人間関係を中心に明らかにしてきた。総じて言えることは、上司・同僚とも非常に良好な関係を築いていた、ということである。公表された白鳥の文章を見るかぎり、それぞれの人物の美点を見だし、高く評価している。もちろん公の場で故人の悪口を言う人はいないだろうが、それにしても白鳥は他者の美点を見出すことに長けていたといえるのではないか。

大村仁太郎が退職したときも、その義弟である白鳥はそのまま学習院に残ることが出来た。本人は「全く運のいゝ話であつた」と述べているが、これも多くの教員と良好な関係を築いていたからだろう。

白鳥は他者の悪口は言わない人だったらしい。白鳥の娘婿（君子の夫）である白鳥清は次のように回想している。

学問の上で、社会的に色々と活動してゐた関係から、時には反対派の者から他派のもの、悪口を聴かされることもあつたが、其の場合、堂々たる意見の相違は別として、それに対する反駁など、下らない感情での人身攻撃などを聴かされる時には、苦虫を食ひつぶしたやうな顔色となるのであつた。家庭に於いても、家族の者に他人の悪口を言ふことなどは、厳しく戒めて置いたし、自分も家族の者の間で他人の悪口などは絶対に言はなかつたのである。<sup>(51)</sup>

このように敵をつくらぬ性格だったため、順風満帆な人生を歩むことが出来たのだろう。白鳥は太平洋戦争中の1942（昭和17）年、「辻堂の別荘」（当時、神奈川県茅ヶ崎町字小和田）で肺炎にかかり亡くなった。病床で家族の者に「おれは幸福だよ」と繰り返し言つたという。「窓を開ける 明日はよい天気だ」。これが最後の言葉となつた。<sup>(52)</sup>

## 註

- (1) 拙稿「白鳥庫吉の歴史教育について」『学習院大学教職課程年報』第3号、2017年5月
- (2) 白鳥芳郎「白鳥庫吉博士略年譜」『東方学』第44号、1972年7月、p.179-182
- (3) 『白鳥庫吉全集』（全10巻）、岩波書店、1969-71年（以下、『白鳥全集』と略す）
- (4) 津田左右吉「白鳥博士小伝」『津田左右吉全集』第24巻、岩波書店、1965年（『東洋学報』第29巻第3・4号、1944年1月）  
石田幹之助「白鳥庫吉先生小伝—その略歴と学業—」『白鳥全集』第10巻、1971年  
五井直弘『近代日本と東洋史学』第1章・第2章、青木書店、1976年  
窪添慶文「白鳥庫吉」『20世紀の歴史家たち（1）・日本編上』、刀水書房、1997年
- (5) 白鳥庫吉「学習院と文部省」『学習院物語』（稿本）、学習院アーカイブズ所蔵（1940年頃発行予定だったが未刊のもの）
- (6) 澤柳禮次郎『吾父澤柳政太郎』、富山房、1937年、「年譜」  
新田義之『澤柳政太郎—随時随所楽シマザルナシー』、ミネルヴァ書房、2006年、p.64
- (7) 三浦梧楼『観樹將軍回顧録』、中公文庫、1988年、p.203-206（政教社、1925年）
- (8) 学習院百年史編纂委員会編『学習院百年史』第1編、学習院、1981年、p.217-258
- (9) 註（5）白鳥庫吉「学習院と文部省」
- (10) 註（7）三浦梧楼『観樹將軍回顧録』 p.232-234
- (11) 註（6）新田義之『澤柳政太郎』 p.40-41
- (12) 白鳥芳郎「祖父白鳥庫吉との対話」『白鳥全集』第10巻、1971年、「月報」 p.8
- (13) 山崎成子「白鳥庫吉と廣池千九郎—信仰と歴史研究における共通点—」『モラロジー研究』59号、2007年2月、p.134
- (14) 「市村博士年譜略」『市村博士古稀記念東洋史論叢』、富山房、1933年
- (15) 白鳥庫吉「学習院に於ける史学科の沿革」『学習院輔仁会雑誌』134号、1928年10月、p.15（『白鳥全集』第10巻所収）
- (16) 註（1）拙稿「白鳥庫吉の歴史教育について」、p.22-23
- (17) 長佐古美奈子「学習院における歴史教育の始まりと標本室」『学習院大学史料館紀要』第19号、2012年3月、p.5-8
- (18) 白鳥庫吉「序」市村瓊次郎『東洋史統』巻1、富山房、1939年、p.7（『白鳥全集』

第10卷所収)

- (19) 市村瓊次郎「白鳥博士還暦記念東洋史論叢の序に代ふ」池内宏編『東洋史論叢・白鳥博士還暦記念』、岩波書店、1925年、p. x viii
- (20) 白鳥君子「父のおもいで (一)」『白鳥全集』第5巻、1970年、「月報」p.4
- (21) 獨協学園百年史編纂委員会「獨逸学協会学校中学と大村仁太郎」『獨協学園史1881-2000』第6章、獨協学園、2000年、p.548
- (22) 白鳥庫吉「大村仁太郎君の伝」『大村教育著述全集』第3巻、同文館、1911年、p.9
- (23) 白鳥庫吉「大村君の性格に就いて」大村仁太郎『子供と家庭 (教育叢話)』、同文館、1907年、「追想録」p.15-18
- (24) 市村瓊次郎「故大村仁太郎君を憶ふ」註(23)『子供と家庭 (教育叢話)』、「追想録」p.19-21
- (25) 山本茂樹『近衛篤磨—その明治国家観とアジア観—』、ミネルヴァ書房、2001年、p.76-78
- (26) 白鳥庫吉「学習院長としての近衛篤磨公を顧ふ」東亜同文会『支那』第25巻、1934年2月、p.49
- (27) 註(8)『学習院百年史』第1編、p.258-262,389-398,605-613
- (28) 近衛篤磨「学習院制度改革意見」近衛篤磨日記刊行会編『近衛篤磨日記』付属文書、鹿島研究所出版会、1969年、p.60
- (29) 註(8)『学習院百年史』第1編、p.391-393
- (30) 註(4)津田左右吉「白鳥博士小伝」、p.131-134
- (31) 註(28)『近衛篤磨日記』第4巻、1968年、p.267-269,323-325
- (32) 石田幹之助「白鳥先生の追憶」『石田幹之助著作集第4巻—東洋文庫の生まれるまで—』、六興出版、1986年、p.138 (『東亜時論』、1964年)
- (33) 註(25)山本茂樹『近衛篤磨』、p.80
- (34) 註(26)白鳥庫吉「学習院長としての近衛篤磨公を顧ふ」p.55
- (35) 註(21)『獨協学園史』p.583-584  
新井孝重「大村仁太郎の教育思想にみる『近代』の可能性」『獨協学園資料センター研究年報』創刊号、2009年3月、p.51-53
- (36) 註(5)白鳥庫吉「学習院と文部省」
- (37) 註(8)『学習院百年史』第1編、P.399-401,613-616
- (38) 佐々木英昭「乃木希典—予は諸君の子弟を殺したり—」、ミネルヴァ書房、2005年、p.38
- (39) 註(8)『学習院百年史』第1編、p.574-577
- (40) 吉廣さやか・戸矢浩子・西山直志「『学び舎の乃木希典』展覧書」『学習院大学史料館紀要』第25号、2019年3月、p.62-63
- (41) 白鳥庫吉「乃木將軍と大和魂」中央乃木会編『乃木会講演集』第3回、1914年、p.62-63
- (42) 註(20)白鳥君子「父のおもいで (一)」、 「月報」p.7
- (43) 註(41)白鳥庫吉「乃木將軍と大和魂」、p.64
- (44) 石田幹之助・他「先学を語る—白鳥庫吉博士—」『東方学』第44号、1972年7月、p.157
- (45) 註(20)白鳥君子「父のおもいで (一)」、 「月報」p.7
- (46) 学習院輔仁会『乃木院長記念録』、三光堂、1914年、p.459
- (47) 吉廣さやか「学習院所蔵の乃木希典遺書とその周辺」『学習院大学史料館紀要』第24号、2018年3月、p.201-202



- (48) 註(4) 津田左右吉「白鳥博士小伝」 p.141
- (49) 「追悼会に於ける白鳥博士講演」『学習院輔仁会雑誌』88号、1914年、p.33-43
- (50) 註(41) 「乃木将軍と大和魂」 p.65
- (51) 白鳥清「父の書齋—書齋に於ける亡き父の思出—」『書齋』第7号、三省堂、1943年1月、p.27
- (52) 白鳥君子「父のおもいで(二)」『白鳥全集』第8巻、1970年、「月報」 p.8